大阪大学欧州拠点と国際交流

海外交流

能　町　正　治*

Osaka University's European center and international exchange.

Key Words：International exchange

はじめに

2021年4月から欧州拠点長を務めております能町正治です。専門は素粒子・原子核実験で、2021年3月に定年となるまでは核物理研究センター・理学研究科・放射線科学基盤機構に在職しておりました。これまでの研究活動の多くは国際共同研究であったため、さまざまな国の研究者と一緒に仕事をする機会がありました。しかし、学生時代は英語が苦手でした。大学の研究室に入るまで、外国人とコミュニケーションをとる機会もなかった私が、国際共同研究を行い、拠点長に至ったのはなぜか、本稿を書くにあたり、考えてみました。

私が博士課程を終えたころは、国内の大学のポストは限られており、研究を続けるには外国でポスドクを行うことが当然という時代でした。英語が苦手な私も、日本を飛び出ることになりました。行った先は、ジュネーブのCERN。なんとかなるであろうと思っていたのですが、実際のところ、なんとかならずに、まずはCERNの英語コースで英語の勉強をすることになりました。

CERNでは、さまざまな国のアクセントの英語でコミュニケーションをとっていました。私もなんとか、いろいろな人とのコミュニケーションを取ることができるようになって、さまざまな人の考えを知ることができるようになってきました。研究の進め方もさまざまで、戸惑うこともありましたが、私は逆に違いを楽しむようになりました。

外国に来て日本でできたことができなくなったと考えるのではなく、日本でできなかったことができると考えることで、違いを楽しむことができたのでしょう。初めて行くところでは、ささいなことでも違いを見つけることができるので、新たなところへ行くことが楽しみとなりました。
新しいものを見聞きすることが楽しかったということは大きな要因ですが、それに加えて一緒に研究をすると楽しいと思える人に恵まれたからかもしれません。

今日、若手研究者にとって海外に出るモチベーションは下がっているように思えます。しかし、最先端の研究を進めるためには、おのずと海外との接点を持つことになります。海外との交流による「多様性」による刺激を若い時期に経験することは、その後の研究を推進するうえで重要と考えます。私が拠点長を務めようと考えたのは、学生や若手研究者が日本では得られない経験を海外で経験することで、研究の幅を広げることができるように少しでも貢献できたらと考えたからです。

欧州拠点

大阪大学の欧州拠点はオランダのグローニンゲン大学の中にあります。人口20万人のグローニンゲンは、グローニンゲン大学の学生だけで3万5千人（26%が留学生）、他の大学の学生も合わせると人口の1/4が学生であると言われている学生の街です。若者が多く、非常に活気に満ちた街であるとともに、

* Masaharu NOMACHI
1956年1月生まれ
大阪大学大学院　理学研究科　物理学専攻博士後期課程（1983年）
現在、大阪大学グローバルイニシアティブ機構　特任教授・欧州拠点長
理学博士
TEL：06-7608-4683
E-mail：nomachi.masaharu.cgin@osaka-u.ac.jp

中世のハンザ同盟の時代から栄えた歴史ある街です。グローニンゲン大学は1614年に創立された歴史ある大学です。歴代学長の肖像画のある部屋はその歴史を感じさせます。一方、環境問題をはじめとしたグローバルな問題に挑むための学位コースをダイナミックに進めるなど、伝統だけの古臭い大学ではありません。グローニンゲンはヨーロッパの伝統と新しさを感じることができる活気ある街と言えます。

グローニンゲン大学との連携は古く、その連携をもとに2005年から大阪大学の海外4拠点の一つ欧州拠点を持たせてもらっています。コロナによるロックダウンを経て、現在常駐者はおらず、出張ベースでの運営を行なっています。オフィスに常駐することによる「存在感」は何者にも変えることはできません。しかし、新型コロナ禍において、さまざまなリモートのツールが開発され、その使い方にも習熟してきたため、リモートでできることも多いことがわかりました。

欧州拠点の役割は、オフィスのあるグローニンゲンだけではありません。すべての協定校にオフィスを持てるわけではないので、出張とリモートを組み合わせた新しい取り組みを確立していく必要があります。リモートのイベントのおかげで、これまであまり留学生が来ていなかった国や地域に対し、大阪大学を紹介する機会を得ています。また、大阪大学と協定校でおこなっている既存の交流に、他の協定校を加えることで、多地点の交流とするなど、交流を広げていく活動も必要と考えています。これらを含め、あらたな拠点のあり方を考えていかなければならないと思います。

国際交流

新しい考え、多様な考えの融合は、学問の発展に大きな貢献をしてきました。国際交流はそのための一つの重要な手段です。研究を進める上では、さまざまな考えや批判にさらされながら考えをまとめていくことが必要です。さまざまな国の多様な研究者と議論をすることで、新しい発想・発見を得る機会も増えます。国際交流は、研究を進めるためには不可欠なものと言えます。文化・習慣の違い、それからくる考え方の違いは強烈な刺激となり、研究の推進力となるでしょう。

これは、逆方向にも言えることです。海外の研究者や学生は、日本にあり、その国にはないものに触れることで、研究の幅を広げることができるはずです。さらに、それぞれ受け入れ側も新たなものを見つけることができます。「異なること」を受け入れることは、「変化」に対して、ポジティブに立ち向かうことにもつながります。国際交流にあたっては、多様性を受け入れ、変化に対応できる人材を、「双方で」育成できるようにしていきたいと考えます。

大学間の交流、特に学生交流ではお互いのシステムを知ることが重要です。欧州拠点があるグローニンゲン大学では、これまでの交流の蓄積でお互いのシステムの違いを知ることができています。これを活かすとともに、他の協定校とも交流を深めていけたらと考えています。国際交流では「継続」が重要です。新型コロナで一旦は途絶えた交流を再度始めるところからとなっています。

多様な考えを受けることができるということは、「変化」に対応できることにもつながります。生物の世界において、多様性に乏しい生物は環境の変化に対応することが困難であると言われています。変化の時代においては、多様性・変化を受け入れることが必要です。

グローバル化を進めるということは、世界の均一化が目的であってはいけないと考えます。多様な考えを得るための方法の共通化にとどめ、それぞれの特徴は失わないようにしないといけません。世界中の大学が同じシステムで同じ教育をするのではなく、それぞれが特徴ある教育・研究を行うが、その上で、人が自由に行き来することができるようにする必要があります。

欧州拠点長として、欧州の大学と交流する機会を持つことで、国際交流に関してもさまざまな異なる取り組みが行われていることを知りました。研究者とは異なる視点を得たことは、私にとって大きな収穫と考えています。その一つが“Internationalization at Home”です。これを実現するために必要なことを考えることで、組織としての大学の国際化が重要であることを強く感じました。大学のシステムもさまざまです。それぞれの文化・歴史を背負ったシステムであり、そのまま真似するようなものではありませんが、さまざまなアイディアを得ることができました。拠点長の立場でできることは限られていますが、「大学の国際化」を目標として進めていきたいと考えています。

おわりに

欧州拠点に出かけることができなかったこともあり、まだ拠点長になったばかりと思っていましたが、1年半が過ぎ、そう言っていられなくなっています。これまでと異なる仕事で、学ぶべき新しいことも多く、やりがいがあると思っております。「大学の国際化」に少しでも役立てばと思って務めております。